



# ARTRAMBLE

|                                                                                  |        |
|----------------------------------------------------------------------------------|--------|
| 学芸員の視点1                                                                          | 28     |
| わたしは常にここにいる<br>—「わたしのいる場所」コレクションから「女性」特集！—について                                   | — 武澤里映 |
| 学芸員の視点2                                                                          | 46     |
| 「描く人 安彦良和」展の準備風景                                                                 | — 安永幸史 |
| ショート・エッセイ                                                                        | 6      |
| 5年目のAndo Gallery                                                                 | — 中谷圭佑 |
| トピックス                                                                            | 7      |
| コレクション展Ⅰの関連事業を実施しました。<br>特別展「描く人、安彦良和」関連事業<br>2024県展を開催しました<br>HART TALK館長といっしょ！ |        |
| 美術館の周縁                                                                           | 8      |
| 関西で没後100年の富岡鉄斎に出会う                                                               | — 剣持翔伍 |

## コレクションから

上から下に繰り返されるフォルムはまるで垂れ下がる花のようにも、生物の骨格のようにも見えます。表面をよく見れば、色面の境界線は明瞭に分かれ、型紙のようなものをういこの形を生み出したことが推測されます。

ヨシダミノルは1959年に京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）西洋画科を卒業し、60年代初めはモダンアート展や京都アンデパンダン展などで活動。その後64年より具体美術協会に参加し始め、翌年には会員となります。70年には渡米し、74年頃から機械仕掛けの「シンセサイザー・ジャケット」を着用したパフォーマンスを展開。78年の帰国後は、兵庫県立近代美術館での展示にも複数回参加しています。2000年代には家族と共にユニット「現代家族」を結成し、活動しました。

本作は具体の会員となった年に開かれた「第15回具体美術展」での出

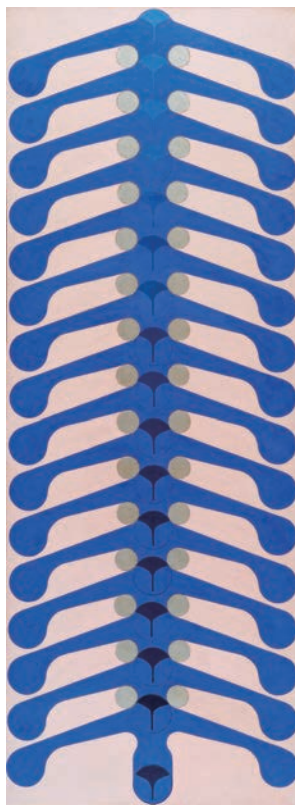
品作の一つ。ヨシダは同展に、本作と同系統の絵画

を2点と、らせん状の立体作品1点の計4点を出品

しました。同展ではヨシダをはじめとする具体の新会員の作品が高く評価され、ヨシダは具体の新傾向の代表的作家とされました。

均質でシンメトリカルな本作は具体に新風を巻き起こすとともに、60年代という時代の表象でもあります。美術評論家の高橋亨はヨシダの絵画を「現時点をスマートに反映する造型である」と評します。グラデーションによって意識される空間やフォルムにある有機性と無機性の両立は、以降のヨシダの制作に継承されていくとともに、同時代のサイケデリックアートや「環境」という芸術概念にも通じたものだと言えるでしょう。

（武澤里映／当館学芸員）



ヨシダミノル(1935—2010)  
 《作品》  
 1965(昭和40)年頃  
 油彩・布  
 350.0×130.1cm  
 令和5年度 公益財団法人伊藤文化財団寄贈

# わたしは常にここにいる

## —「わたしのいる場所—コレクションから「女性」特集！」について

### 武澤里映

8月20日より始まったコレクション展Ⅱのうち、「わたしのいる場所—コレクションから「女性」特集！」は、当館のコレクション展ではほとんど初めてとあってよい、女性作家と女性像の作品を展示する企画である<sup>1</sup>。1階部分では常設展示室1・2・3室の計3室を用い60名以上の女性作家による作品を、2階の常設展示室6室では主に近代日本における女性を描いた作品を展示している。主担当は筆者となったが、主とは実質名ばかりで、当館のジェンダーギャップについても論考を書いている橋本こずえ学芸員<sup>2</sup>を始め、西田桐子学芸員、江上ゆか学芸員、林優学芸員と協働しながら展示を作り上げた<sup>3</sup>。「わたしのいる場所」の図面や作品選択は、1階部分は橋本学芸員が主体となり、筆者は2階部分の同作業を担当した。作品解説や章立ては、お互いに話し合いを重ね分担している。本稿ではこうした経緯を踏まえ、展示作品や章解説については会場内のパネルに譲り、設営作業を終えた今の所感を記してみたい。

女性作家を展示するという趣旨の企画にとって一番の課題は、それが「女流作家」展の構造を再生産しないかどうかであろう。美術史家のグリゼルダ・ボロックが述べるように、「フェミニスト美術史がまずなすべき仕事は、美術史学そのものの批判」<sup>4</sup>である。埋もれてきた女性作家を取り上げ、既存の美術史に位置付けるのはもちろんまぎれもない前進である。他方でその営みは、決して「女性らしさ」「女性作家らしさ」「女性の美術史」として括られてしまってはならない。「女性らしさ」というステレオタイプやカテゴリーを再生産するのではなく、それを生み出してきた美術史の体系それ自体を考え直す必要がある。本展ではこうした観点から、サブタイトルの「女性」にカギカッコを付し、女性作家と描かれた女性像、つまり主体としての女性と客体としての女性のどちらをも展示し、双方向からアプローチする企画となった。

タイトルの「わたしのいる場所」は、筆者の発案ではなく、担当学芸員にアイデアを募る中で出てきたものだ（匿名で募ったため発案者は分らない）。本展は9月28日から行われる特別展「石岡瑛子<sup>アイ</sup>「デザイン」」に連動し行われている企画であることから、「わたし」が強調された名前となっている。他方でその「わたし」の強調は、2000年代以降盛んとなっている「MeToo運動」や、日本で初めてのフェミニズムやジェンダーの視点による展覧会というべき1991年の「私という未知に向かって—現代女性セルフ・ポートレート」展（東京都写真美術館）にも通じる。そしてまた「場所」というキーワードも、元パートナーであったアナ・メンディエタの死について疑義の残るカール・アンドレの展示に際ししばしば行わ

れるアクションが「Where is Ana Mendieta?」<sup>5</sup>という名前であるように、女性作家の位置づけを探り、既存の美術史を問い直す姿勢と共鳴している。わたしはどこにいるのか？という「わたしのいる場所」を問う姿勢は、フェミニズムの基盤にある考え方とも言えるのではないだろうか。

本展のこうした「わたし」を問う姿勢は、章構成や解説にも反映するように意識した。章は大きく「みるわたし」と「みられるわたし」に分かれ、前者で女性作家、後者で描かれた女性に焦点を当てている。各章はそれぞれ細かなカテゴリーに分かれており、前者では「生活」「私の身体」「風景」「素材」「歴史・物語」「反復と拡大」という6つ、後者では「ある女性」「はたらく女性」「母と子」「裸婦」という4つの枠で作品を分類した。特に「みるわたし」のカテゴリーについては、ポンビドゥーセンターで2012年に行われた「エル(Elle)」展などの分類も参考にしている。

また特に女性作家の解説では「わたし」のバックグラウンド、そして作家自身の言葉をより多く含められるよう心がけた。女性作家はしばしば、彼女たち自身の芸術論ではなく、プライベートな生活や性、年齢で切り取られることが多かったと言えるだろう<sup>6</sup>。他方でリンダ・ノックリンが指摘するように、女性作家の活動が制限され浸透してこなかった背景には、社会制度や教育といった構造の問題があり<sup>7</sup>、その活動を背景なしに解説することもまた「女性」の神秘化につながってしまう。本展の解説ではその両者を折衷するために、女性作家のバックグラウンドの事実をできるだけ並べながら、彼女たちが独自に持っていた芸術論やジェンダーに対する態度を選択し取り上げることとなった。女性作家にはできるだけ解説を付すようにし（すべての作家につけることは叶わなかったが）、50以上の解説を橋本学芸員と分担し付することができた。

そのような本展は最終的に、女性作家をめぐる様々な環境はもとより、兵庫県立美術館自体の歴史や特色をも考え得るものになったのではないだろうか。これは林洋子館長が記者説明会で語った言葉にもよるものだが、本展で集められた女性作家は、近年に意識的に収集されたと言うよりは、美術館活動の蓄積によって自然に集められたものである。今回の展示で新鮮に映るものの一つに、ケーテ・コルヴィッツ、ルイーゼ・ネヴェルスン、ソニア・ドローネー＝テルク、ゾフィー・トイバー＝アルプ、ポール・ヴェズレイ、バーバラ・ヘップワースといった、兵庫県立近代美術館の時代に収集された海外の作家たちが挙げられるだろう。前身である近代美術館時代に海外の彫刻と版画の収集に力をいれていた中で、ネヴェルスンの「セルフ・ポートレート」シリーズなど、国内でも珍しい作品が所蔵されてい



展示風景（左から、招瑞娟、青木千絵、木下佳通代、ルイーゼ・ネヴェルスンの作品。）

る。今回の展示の「私の身体」というカテゴリーでは、昨年度の新収蔵品となった版画家で、コルヴィッツに影響を受けた招瑞娟<sup>しょうずいけん</sup>をコルヴィッツと並べ、国も年代も違う作品を同じ視点から考えることができた。その他の箇所でも同様に、「歴史・物語」の箇所ではマリー・ローランサンの作と西山美なコの作が、そして2階では「母と子」の箇所で渡辺一郎と亀高文子という実の親子による作を並べられたのも、コレクションが交錯する貴重な機会を提案できたのではないかと感じている。

またたとえば、ブラジル日系移民による62点の作品をご寄贈いただいたリカルド・タケシ・赤川氏のコレクションや、80年代以降関西画廊のの中心的存在となった信濃橋画廊の画廊主・山口勝子氏による寄贈「信濃橋画廊コレクション」から選んだ作品群は、いずれも兵庫県の特色や当館の研究蓄積に関連するコレクションであり、女性作家であることを意識して収集されたものではない。しかし本展の視座から見た際には、そこにかの地ブラジルで生活と共に画業も試みた女性たちや、80年代以降の関西で活躍する作家の作品が多数含まれていることに気づくのである。

こうした気づきは、「女性」に注目する展覧会が、美術館自身の特色を改めて考える機会をもたらすことを意味している。そしてそれはまた、地方で活動していたり、エスニシティの違いなどで注目されてこなかった作家たちを新たに発見できる機会とも言える。

本展で展示した女性作家の作品には、これまでの出品歴が非常に少なかったものが数多くある。しかしそれは、その作品の質の高低によることなのだろうか？初の女性館長が就任し、学芸員の7割近くが女性である中で時宜を得て行われた本展が、今まで出品される機会が少なかった作品を見直す機会になること、そしてそこから「なぜこの作品が、展示される機会が少なかったのか」という疑問につながることを願っている。なぜならばそれは、リンダ・ノックリンがおよそ50年前に述べたような、新たな地平を開く一助となるだろうからだ。

いわゆる「女性の問題」は、真面目で確立された学問領域の本質から外れた、マイナーかつ周辺的な問題、滑稽で些末な問題ではない。それどころか、それは新たな地平を切り開くための触媒、知的な道具になりうるもので、基本的に自明のものとされる前提を問い直し、これまでにない別種の内的な問いを立てるためのパラダイムを提供する。<sup>8</sup>

わたしはどこにいるのか、わたしの場所はどこにあるのか？本展で筆者がとりわけ出したかった作家に、日系移民画家の田菊ふみがいる。1940年に新潟で生まれ60年にブラジルに渡った田菊は、石と工具をランダムに並べた独自の静物画を描き続けた。本展出品作の《15:30の石》も同系統の作であり、これは収蔵庫に入っですぐ、一番よく見える棚にかかっていた。シュールレアリスムなのか、戦後の社会派リアリズムなのか、いかんとも分類しがたいその表現は、調べてみれば2000年代の、しかも日系ブラジル移民の作である。日本の美術史の一作品と勝手に誤解していた筆者にとって、それは驚くべき発見であり出会いであった。筆者の限りある美術史の理解では追いつけない作品や作家が、この兵庫県立美術館には数多にある。そしてそれは様々に歴史をもつ、他の美術館でも同様だろう。常にそこにいる存在を、拾い上げていく。「わたし」は常にここにいるのだ—たとえばそれは、収蔵庫の片隅に。

本展では、当館が所蔵する女性作家の作品をすべて展示することは叶わなかったうえ、資料調査の至らなさで解説を十分に書くことができなかった作家も複数いる。今後もこうした展示が続けられていき、アップデートされていくことを願い、本稿を閉じることとしたい。

（たけざわ・りえ／当館学芸員）

1 たとえば女性像をとりあげたコレクション展では以下のものが挙げられる。『兵庫県立美術館 2010 年度コレクション展Ⅲ』、2010 年 11 月 20 日から 2011 年 3 月 13 日、兵庫県立美術館。またコレクションを活用した特別展示で、女性作家を取り上げた章を設けた展示もある。『今こそ GUTAI 県美の具体コレクション』、2020 年 12 月 5 日から 2021 年 2 月 7 日、兵庫県立美術館。  
2 当館所蔵品や展覧会に関わる男女比についての論考は以下を参照。橋本こずえ「美術館におけるジェンダーバランス—兵庫県立美術館の現状について」『兵庫県立美術館紀要』第 17 号、2023 年、20-29 頁。  
3 今回のコレクション展では、この「わたしのいる場所」以外にも、「重要文化財指定 特別展示 本多錦吉郎〈羽衣天女〉」「版画の詩人—清宮質文と駒井哲郎を中心に」「近現代の彫刻」「小磯良平—モデルと画家」「金山平三—金山らくに注目！」の展示や新収蔵品のヨシタミノル《作品》のお披露目展示なども並行し行われている。  
4 グリゼルダ・ボロック著（荻原弘子訳）『視線と差異—フェミニズムで読む美術史』1998 年、新水社、45 頁。  
5 「Where is Ana Mendieta?」の運動について、日本語でまとめられたサイトとして以下がある。『Where is \_\_?』ホームページ、https://whereis-projectinjanp.studio.site/、2024 年 8 月 23 日最終閲覧。  
6 こうした美術界の姿勢を顕著に受け、そして自らその状況を分析したものとして、長島有里枝の以下の著作がある。長島有里枝『「僕ら」の「女の子写真」からわたしたちのガールiefotoへ』大福書林、2020 年。  
7 リンダ・ノックリン著（野澤朋代訳）『なぜ偉大な女性芸術家はいなかったのか？』Vol.1「日本版アートニュース」https://artnewsjapan.com/article/799、2024 年 8 月 23 日最終閲覧。  
8 同上。

# 「描く人、安彦良和」展の準備風景

安永幸史



遠軽調査風景（左が安彦良和氏） 2022年8月25日

## はじめに

2024年6月8日（土）から9月1日（日）の期間に開催された、特別展「描く人、安彦良和」。本展覧会は、『機動戦士ガンダム』のキャラクターデザインとアニメーションディレクターを担当し、現在は漫画家としても活躍している安彦良和氏の大規模回顧展である。これまで、『機動戦士ガンダム THE ORIGIN』といった安彦氏制作の特定の作品に絞った上での原画展などは度々開催されていたが<sup>1</sup>、幼少期から現在までに制作された作品を総合的に展示したものは今回が初である。そうした点を踏まえて、以下では、「描く人、安彦良和」展の準備作業から作品選定作業を概観しつつ、本展覧会の構成について総括を行いたい。

ただし、筆者の担当は、展示作品の中でも『機動戦士ガンダム』シリーズと『天の血脉』『蜚の王』『ヤマトタケル』である。そのため、話題がそちらに偏ることはご承知いただきたい。

## 調査段階

本展覧会の準備作業が本格的に始まったのは2022年4月からだった。その始まりとして、安彦氏の自宅に保管されている作品の調査が開始された。どのような作品がどの程度あるのか全くわからない手探りでの調査であったが、ここでカラーイラスト原画と漫画原稿に関して一通り実見し、所在を確認できたことは大きかったと言える。実際、本展覧会は安彦氏の仕事の総体を概観する回顧展という体裁であるため、アニメに関係する仕事だけでなく、挿絵や漫画などの仕事も紹介する必要があった。この調査で得られた漫画原稿などに関する情報は、先述した展示する漫画原稿を選ぶ上で重要なものとなった。また、本調査では小説版『クラッシャージョウ』の挿絵原画がもともと鉛筆で描かれており、それをコピーしたものにスクリーントーンを貼るなどして仕上げているということが、実作品から確認できたことも、当時の制作状況を知る上で大きかったと言える。

その後、2022年8月には安彦氏の生家のある北海道紋別郡遠軽町での調査が行われた。この調査では、安彦氏が中学生のころに使用した学習用ノートである『重点整理帳』や、少年期に使用していた机などを実現することができた。また、安彦氏の高校時代の同級生から、学生時代の安彦氏の様子などを聞くことができたことも大きな収穫であった。これらの資料は基本的に第1章に展示されることになったが、安彦氏の幼年期の活動を示す一連の資料―特に『重点整理帳』―は、手塚治虫の影響などといった安彦氏の作品制作における原点部分を示すものとして反響が大きく、導入としてこれ以上ない資料となったと思う。

そうして2023年の5月末から6月初めにかけて、パイダイナムコフィルムワークス（BNFW）に所蔵されている、安彦氏が関わったアニメーション作品の中間制作物の調査を行った。本調査では、これに加えてアニメ特撮アーカイブ機構（ATAC）所蔵の資料及び、安彦氏所蔵の資料の中で、2022年4月時点では他の展覧会に出品していた『機動戦士ガンダム THE ORIGIN』関連の資料の調査も併せて行った。本調査は、キャラクター設定原画など、安彦氏が関わったアニメ作品における中間制作物の調査を目的としており、基本的には、本調査でほとんどの作品の調査を完了として、この後はこれまでの調査を踏まえて展示作品の選定を行う予定であった。しかし、本調査の最中に、安彦氏にいくつかの資料の所在についてうかがったところ、自宅の倉庫に原画などの束がおいてあるかもしれないとのご返答をいただいたため、7月に追加の調査を行うこととなった。

こうして行われることになった2023年7月の調査だが、調査が始まる前の個人的な目算では、この調査で見つかるものがあつたとしても、その出品はあくまで補助的なものととまり、メインとなる出品物はアニメ系ならBNFW所蔵品、漫画原稿ならば2022年4月に調査したものになるだろうと考えており、そのことを前提として作品の候補のピックアップを始めていた。しかし実際に調査を始めてみると、この目算は良い意味で裏切られることとなった。非常に重要な資料が多く見つかったからである。例えば、大河原邦男によるガンダムの初期デザイン案に赤鉛筆での変更提案がなされている資料は、この調査で見つかったものである。安彦がガンダムの頭部に「マスク」をつけたという証言は以前からあつたが、今回出た資料はまさに口の部分に鉛筆線と赤線でガンダムの「鼻」を覆うように「マスク」が足されており、証言を裏付ける資料が実際に残っていたという点で非常に意義深いものと言える。他にも、『宇宙空母ブルーノア』への安彦氏の参加を示す資料<sup>2</sup>や劇場版『機動戦士ガンダム』のポスターのラフデザイン案、未実現の企画ではあるが、『古事記』を題材としたOVA（オリジナルビデオアニメ）作品である『命 MIKOTO』の企画書なども本調査で発見された印象深い資料である。特に『命 MIKOTO』は、安彦氏によるアニメーションの仕事と1990年代以降の歴史漫画家をつなぐ仕事として位置づけられる可能性があり、本展覧会のテーマである「安彦良和の幼少期から現在までの仕事の総覧」という観点からは非常に重要なものであつた。結果的には、この調査の出品物は、筆者が担当したガンダム関係の展示においても中心的な出品物となっていくことになり、調査としてみればうれしい悲鳴だったが、調査前に始めていた展示作品のリスト化は再考を余儀なくされた。



展示風景



展示風景

## 章構成と作品選定

さて、こうして調査は一段落し、展示作品の選定を行うこととなった。ここでは、基本的な作品選定の方針などについて確認していきたい。

はじめに述べたように、本展覧会は安彦氏のこれまでの創作活動を概観するのが目的であり、アニメ関連の仕事も漫画関連の仕事も同様の重要性を持つものとして扱うこととした。基本的な展示構成としては、第1章で幼少期から青年時代の創作活動を展示し、第2章でアニメーターとしての活動の初期からガンダム以前を、第3章でガンダムシリーズの中で果たした役割を、第4章でガンダム以後の創作活動を主に紹介した。その後、第5章では安彦氏による歴史漫画を、第6章では『機動戦士ガンダム THE ORIGIN』など、2000年以降から現在に続く安彦氏の仕事を表示することで、幼少期から現在に至るまで大まかに年代ごとに安彦氏の創作活動の軌跡を辿ることを企図している。この中で筆者は、3章の作品全体と、5章6章の一部を担当した。

さて、本展覧会の1章から4章のアニメ関連の出品候補作品としては、ポスターなどのイラスト原画や漫画の原稿などといった「完成作」の他に、アニメ作品が完成に至るまでの過程で必要となる絵コンテやキャラクターなどの設定資料、原画などの「中間制作物」と呼ばれるものが多く含まれていた。この、いわゆる中間制作物は、アニメ制作の際の指示や修正跡など、制作現場での試行錯誤の痕跡が生々しく残っていたりすることもあり、制作時の様子をうかがうことのできる資料として価値の高いものと言える。ただし今回『機動戦士ガンダム』シリーズの展示作品を選ぶに当たっては、中間制作物の中でもセル画などは選ばず、アニメーションの原画やキャラクターデザイン案などを中心に展示を構成した。これは、本展が美術館での展覧会であり、展示作品についても安彦氏の純然たる制作物であること、言うなれば安彦氏の手跡が直接的に残っていることを基準にしたいという考え方によるものである。また、2023年7月の調査での新出資料がアニメーションの原画や設定資料、ポスターなどのイラストのラフ原画を多く含んでいたため、本展初出展の資料を増やすという意味合いもこうした構成には含まれている。とは言え、こうした鉛筆画などだけでは展示の印象が地味になるため、ポスター原画やカラーイラストの原画も交えて、劇場版のポスター原画など定番とも言えるものを展示するなど、全体のバランスをとることとした。

一方、漫画原稿については、個別作品ごとに異なったテーマはあるものの、基本的には物語のクライマックスもしくは重要シーンの中から、特に絵として魅力があるものを選んだつもりである。こうした選び方は特に5

## 学芸員の視点2

章の『蜚の王』や『ヤマトタケル』において顕著である。しかし、6章の『機動戦士ガンダム THE ORIGIN』についてだけは、少々特殊な選び方をしている。本作は、アニメ版『機動戦士ガンダム』を安彦氏が漫画としてリメイクしたと言える作品であり、設定の修正などは随所に見られるものの、基本的なストーリーラインは1979年に放送したものを踏襲している。ただし、単行本の9巻から14巻までは主人公のライバルキャラクターであるシャア・アズナブルの過去を描いた安彦氏の完全オリジナルの部分となっており、安彦氏の漫画家としての仕事とオリジナリティを強調しやすい部分と言える。また、『機動戦士ガンダム THE ORIGIN』は安彦氏が監督を務めるかたちで「シャアの過去編」がアニメ化されている。このアニメ版『機動戦士ガンダム THE ORIGIN』も6章に展示されているため、これについて漫画版と対比的に紹介するならば、漫画原稿も「シャアの過去編」から選ぶのが妥当であると考え、漫画原稿は単行本の9巻から14巻掲載分から選択した。

## おわりに

ここまで「描く人、安彦良和」展の準備から作品選択までの流れを概観した。本展覧会は、「超・大河原邦男」展（2013年）「富野由悠季の世界」展（2019年）などに続く、サブカルチャー関連の展覧会であるが、アニメ関連の資料だけでなく漫画関連の資料もあり、それらをバランス良く概観するという点に独自の点があつたように思う。

また、今回の展覧会の準備段階でもう一点印象深いことがあつた。本展の出品候補は先に述べたように中間制作物が多く、制作者である安彦氏にお話をうかがう際も、「完成品ではないもの」を展示することの意義を問いかねられることが多くあつた。その際は、「制作者の手跡が残っていること」や「資料的価値の高さ」をその理由としたが、こうした中間制作物の価値と今後の保存法について問いかねられたように感じた出来事だった。

（やすなが・こうじ／当館学芸員）

1 2022年から2023年にかけて、ところざわサクラタウンをはじめ全国を巡回した「安彦良和／機動戦士ガンダム THE ORIGIN 展」がその一例として挙げられよう。  
2 「ブルーノア」に関する資料の重要性については、氷川竜介「【氷川竜介の「アニメに歴史あり」】第52回 安彦良和回顧展とアニメの転換点」(https://anime.eiga.com/news/column/hikawa\_rekishi/121542/)に詳しい。

# 5年目のAndo Gallery

中谷圭佑



Ando Gallery と青りんご ©Masaki Tada

## ショート・エッセイ

安藤忠雄建築研究所の設計および寄贈により増設され、2019年にオープンした Ando Gallery も、今年で5周年を迎えた。国内のみならず、海外からの来場者数も増え、青りんごへの道順を尋ねられることも多くなったと聞く。海外、特に中国や韓国からの来場者が多いのは、根強い安藤建築人気はもちろん、2017年の国立新美術館に始まり、ポンピドゥー・センター（フランス、パリ）、アルマーニ／シーロス（イタリア、ミラノ）、復星芸術センター（中国、上海）、北京民生現代美術館（中国、北京）、ミュージアム SAN（韓国、原州）と、6年間かけて5か国6会場を巡回した大規模な安藤忠雄展の影響も少なからずあるはずだ。あのとき見た模型がある！と驚く人もいるのではないだろうか。

Ando Gallery の発端となったのは、2003年に当館で開催された「安藤忠雄建築展 2003 年 再生一環境と建築」展、及びロビーの一角で続けられてきた震災復興のプロセスを紹介するコーナーだ。ここでは2004年度に安藤忠雄建築研究所より寄贈された阪神淡路大震災関連資料などが展示されていた。現在これらの資料は、ギャラリー2階の「兵庫／震災」セクションにて展示されている。その後、館蔵資料の扱いの観点などから、2007年のコレクション展Ⅲ以降はロビーでの展示が常設展示室5の東側に設けられた「安藤忠雄コーナー」へと移され、美術館のエントランスへ向かう来場者がガラス越しにも鑑賞できるようになっていた。しかし、それでも有料ゾーンでの展示になってしまったこともあり、安藤氏は「よりオープンに、兵庫の文化のこれからにつながるものに出来ないか」という構想を井戸敏三元県知事、養豊元館長（現名誉館長）と話し合った。そうして、2016年にギャラリー増改築の話が持ち上がり、2018年1月より工事が開始。いまや美術館の一大フォトスポットとなった「青りんご」が同じく安藤氏の寄贈により一足先に海のデッキに設置され、2019年5月23日、ついに Ando Gallery がオー



Ando Gallery 増築前

ブンしたのである。

あれから5年の月日を経て、阪神淡路大震災から30年の節目や、来年4月に開催を控えた大阪・関西万博などを契機に、Ando Gallery もまた再出発の岐路に立たされている。2019年7月25日発刊のアートランブル63号では、元当館学芸員の出原均（現アーツ前橋館長）がオープンまでの経緯や、建築的な特徴、展示の内容をまとめたうえで、次のように記している。「スタートを飾る展示は、兵庫／復興、原点／仕事、最新プロジェクトの3つの章の下に企画されたが、今後、展示替えによって内容が変わっていくだろう。」しかし、オープン以来、模型やパネルの多少の入れ替えはあれども、これまで大きく展示内容が変わることはなかった。では今後、どのように変化していくことが可能だろうか。

展示内容については、2019年当初より安藤忠雄建築研究所が計画・運営してきた。美術館へ寄贈された資料に加え、コンクリートで作られた《住吉の長屋》や《光の教会》の模型、2016年の第15回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展の際に制作された《プンタ・デラ・ドガーナ》、2017年の国立新美術館での大規模個展の際に制作された《ブルス・ドゥ・コメルス》の30分の1サイズ模型などが加わり、安藤氏の膨大な仕事の一端が、ギャラリーいっぱいに紹介されている。ただ一方で、現在展示されている建築のうち兵庫にあるものは《淡路夢舞台》、《六甲の集合住宅ⅠⅡⅢⅣ》、《ロック・フィールド神戸本社／工場》、《小篠邸／KH ギャラリー》、《真言宗本福寺水御堂》のみで、《六甲の教会（風の教会）》、《兵庫県立こどもの館》、《姫路文学館》、《兵庫県 木の殿堂》、《西宮市貝類館》、そしてもうひとつの“住吉”の住宅として知られる《松村邸》など、まだまだ紹介されていない素晴らしい安藤建築が県内には数多くある。

ギャラリー3階で紹介されている最新プロジェクトについても更新が必要だろう。安藤忠雄建築研究所が設計し、大阪市へ寄贈した《こども本の森 中之島》は、いまでは《こども本の森 遠野》、《こども本の森 神戸》、《こども本の森 熊本》と、全国的なプロジェクトとして広がりをを見せている。香川県・直島町を舞台に、1989年の直島国際キャンプ場の監修以来、福武財団とのタッグで継続的におこなわれてきた直島プロジェクトでも、2025年春に《直島新美術館》が開館予定だ。国外では、オランダ、オッテルローにあるクレラー＝ミュラー美術館の新館増築計画なども進められている。

ここからさらに次の10年に向けて、兵庫における他の安藤建築や、より最新のプロジェクトの紹介を織り交ぜながら、安藤忠雄建築研究所と美術館が協力して展示を考えていかなければならない。もちろん、「震災復興のプロセスを紹介するコーナー」という、大切な初心も忘れずに。展示を見た後、青りんごの横から海を眺めた人々が、かつて若かりし安藤氏がそうしたように、日本中、世界中の建築作品へと旅をしたくなる、Ando Gallery がそんな場所となることに期待したい。

（なかや・けいすけ／当館学芸員）

## コレクション展Ⅰの関連事業を実施しました。

「白髪一雄生誕百年特別展示」を基軸に、同時期に開催の特別展と関連づけた主題を展示室ごとに設け、新機軸を打ち出したコレクション展Ⅰ。会期中にさまざまな関連事業を実施しました。

まずはコロナ禍が明けたのを機に再開された学芸員によるギャラリートーク。展示室ごとの特徴を、それぞれリストアップした学芸員が作品の目の前で5回にわたって解説しました。うち3回は定員制の参加者にイヤホンを装着していただき、学芸員がマイクを用いるインカム方式を導入。参加者はイヤホンを聞きつつ作品を目の前にじっくり鑑賞することができるようになりました。

昨年度から実施の「ゆっくり解説会」を会期中に2回、聴覚障害の方などに向けて、スライドを併用し手話やモニターでの字幕とあわせて、通常よりゆっくりと解説を行いました。

6月23日に実施のこどものイベント「アクションペインティングにちようせん！」では、白髪特別展示を鑑賞後、白髪の作品を特徴づける流動的な抽象画にならって、参加者は手のひらなどを使い大量の絵具を用いて自由に創作していきまし

た。そのほかにも当館ミュージアム・ボランティアによるギャラリートークを会期中の毎週土・日曜日に開催しました。

（相良周作／当館学芸員）



白髪特別展示会場での学芸員によるギャラリートーク



ゆっくり解説会2回目

## 特別展「描く人、安彦良和」関連事業

特別展「描く人、安彦良和」では、展覧会初日である6月8日に、安彦良和氏が監督を務めたアニメ映画『ヴィナス戦記』の上映会を、午前・午後の2回行いました。午前の部の終了後には本作の作画監督を務められた神村幸子氏と安彦良和氏によるアフタートークも開催され、会場を沸かせていました。また、7月28日には安彦氏によるサイン会も行われ、学芸員による解説会も8月3日及び8月17日に開催されました。

上記に加え、こどものイベントとして「描く人になろう！」と題した、安彦氏の作品の模写を行い作品への理解を深める試みを行いました。冒頭にはサプライズとして安彦氏が登場。子どもたちは大興奮だった様子です。

この他、6月9日と7月27日には109シネマズHAT神戸で『クラッシュジョウ』、『ネオ・ヒロイック・ファンタジア アリオン』のアフタートーク付上映会が行われました。また、8月11日には庵野秀明氏と安彦氏のスペシャル対談が企画されていましたが、庵野氏のお怪我により中止となりました。

（安永幸史／当館学芸員）



『ヴィナス戦記』上映会アフタートーク

## 2024県展を開催しました

兵庫の夏を彩る61回目の県展は、8月3日から8月17日まで原田の森ギャラリーで開催しました。応募数は583点と昨年度よりわずかに減ったものの、20代の出品が大幅に増加し、計201点の作品が展示されました。各部門の一席から選ばれる県展大賞は彫刻・立体部門一席の小岩芽生さんの《虎龍決戦》に、来場者からの投票による県民賞は絵画部門佳作でもあるTakAさんの《琵琶湖360°》に決定しました。

審査員の先生方からは、いくつもの部門で、前年度より応募作品のレベルが高く、審査にも力が入ったとの声をいただきました。今年度は展覧会への来場者数増加を目指し、応募用に加え展覧会告知用ポスターを作成し、最寄りの駅に掲示しました。残念ながら昨年度には及びませんでしたが、2,465名の方にお越しいただきました。外出が危険に思えるほどの猛暑の中、ご出品、ご来場くださったみなさまに深く感謝申し上げます。

（遊免寛子／当館学芸員）



「2024 県展」会場風景

## HART TALK 館長といっしょ！

6月16日のVol.8は、京都市立芸術大学の学長を務める画家の赤松玉女氏に、「アーティストにとっての故郷、大学、美術館」と題して、ご自身の作品と、京都市立芸大の沿革や移転したばかりの新キャンパスの模様をお話いただきました。トーク中には、同じく尼崎市生まれの白髪一雄さんとのエピソードも。ギャラリー白で個展を開いた際、隣の部屋では白髪さんの個展が開催され、画廊主から赤と白でめでたいと言われたのだそうです。7月7日のVol.9では、画家の堂本右美氏が、「堂本尚郎、毛利眞美——娘・堂本右美が語る《画家たちの家》」と題し、両親である二人の画家について、1950年代の貴重な写真を交えながら話ってくださいました。最後はレクチャールームから常設展示室へと場所を移し、父・堂本尚郎さんの作品を前にしたトークとなりました。

（鈴木慈子／当館学芸員）



赤松玉女氏



左 堂本右美氏 右 林館長

### ●—— 編集後記

● 例年にも増して容赦ない猛暑が続いた今年の夏。そんな中でも、「描く人、安彦良和」展、「2024 県展」とともに多くのお客様にご来場いただき、御礼申し上げます。  
● 女性作家と描かれた女性像を取り上げたコレクション展Ⅱと連動して、小磯良平記念室では画家とモデルの関係を、金山平三記念室では、妻・金山らくに注目した展示を行っています。先の号でお伝えした本多錦吉郎（羽衣天女）も、重要文化財指定後、初のお披露目となりました。（林）

兵庫県立美術館  
quarterly report  
ART RAMBLE  
VOL.84

2024年9月27日発行  
編集・発行：兵庫県立美術館  
〒651-0073  
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1  
印刷：有限会社リストワーク

# 関西で没後100年の 富岡鉄斎に出会う

## 剣持翔伍



京都国立近代美術館「没後100年 富岡鉄斎」展 看板と桜（筆者撮影）

### 美術館の周縁

令和6（2024）年、歳は甲辰に在り。本年は富岡鉄斎（1836～1924）の没後100年にあたる年である。桜の開花と時期を合わせるように開幕した特別展「没後100年 富岡鉄斎」（京都国立近代美術館、4/2～5/26、巡回有）を皮切りに、「鉄斎」を屋号に冠する鉄斎堂による「没後100年 80代の鉄斎展」（ギャラリー鉄斎堂、5/11～5/19）、奈良県では特別企画展「没後100年 富岡鉄斎―知の巨人の足跡―」（大和文華館、4/12～5/19）が、さらに盛夏になると鉄斎生前からゆかりの深い高島屋の主催する特別展示「没後100年 富岡鉄斎『贈君百扇』―君に百扇を贈る―」（高島屋史料館、7/13～8/19）が開催されるなど、メモリアルイヤーを記念した展覧会が関西の各地で陸続とおこなわれた。本稿では、本年にはじめてまとまった鉄斎作品に出会った筆者が参観した上記各展の記録と所感を記してみたい。

「最後の文人画家」とも称される鉄斎は、画のみならず書や篆刻などさまざまな分野を愛でた文人で、学識に裏打ちされた諸芸において89歳の最晩年に至るまで数多くの独創的な作品を生み出し続けた。こうした鉄斎のメモリアルイヤーを寿ぐ展覧会は過去にも数多く催され、「生誕150年記念 富岡鉄斎展」（京都市美術館、1985年11/1～12/1）を筆頭に、当館においても「生誕180年記念 富岡鉄斎―近代への架け橋―」（2016年3/12～5/8）が開催されたことは記憶に新しい。

さて、没後100年にあたる本年の各展覧会は、鉄斎を語る上で欠かさない主要な作品群と資料類を網羅しており、諸芸と生涯を味わうことのできる大変恵まれた好機であった。筆者が会期中三度足を運んだ京近美では、《安倍仲麻呂明州望月図・円通大師呉門隱栖図》（大正3（1914）年、重要文化財、辰馬考古資料館所蔵）のように、関西を中心とした地域・人物との関連、および日本美術・古典との繋がりに比重を置いた鉄斎作品、そして書簡や筆録、膨大な書きつけが残る遺愛品等々、豊富な資料に至るまでが一堂に会した。特筆すべきは、全122方が集められた鉄斎の所用印の展示で、一部は印章とそれが捺された作品が並べられた。鉄斎自身を含めた名家たちが刻した印章は、宝玉や琥珀といった華麗な印材とそこに凝らされた印鈕（レリーフ）も含めて、多くの来場者を惹き付けていた。京近美から白川筋を下ってほどなくの鉄斎堂ギャラリーでは、日中の古典・歴史に取材した80歳代の優品（軸作品）が会場を埋め尽くし、鉄斎自らが染筆した箱書とあわせて充実した鑑賞ができた。大和文華館では、鉄斎と当時の中国におけるトップクラスの文人・学者である羅振玉（1866～1940）の合作《挿花鼎図・聯》（大正4（1915）年、清荒神清澄寺鉄斎美術館寄託）などから、中国人士とさかんに交流をおこなった足跡と書画芸術の源流である中国の文人世界に憧れ続けた鉄斎の姿が垣間見えた。さ

らに、贈答品であった扇子100点を一挙展覧した高島屋史料館では、即興の作品でも遺憾なく発揮された博覧強記ぶりと技量が存分に堪能できた。

鉄斎が実際に活動していた地域において各館の展示を通覧し、さまざまな角度から鉄斎作品をみつめることで、その姿が立体的に浮かび上がってくるように思われた。

最後に、主に書跡を専門とする筆者の所感を記しておこう。書画の点画に注目する筆者は、画と書（それを用いた資料類も含む）の枠組みを越えて存在する「線」に惹かれる。常軌を逸したとも解される鉄斎の書表現は、一般的なものさしでは評価できないようだが、書画に共通する線やそれをもたらす運筆・道具はヒントにならないだろうか。文字についていえば、画に添えられる賛や落款の書体と画題との関係性、その年代による変遷、それに添えられた印章の選択など、興味はつきない。一作家に欠かすことのできない名品は幾度も展示されてしかるべきだが、従来「画家」として絵画作品を機軸に構成されてきた鉄斎展に対して、新たな視座の導入が展示構成に新鮮さをもたらすということもあるだろう。

筆者の最も印象に残っている作品は、京近美でみた《青緑山水図》（明治45（1912）年、清荒神清澄寺鉄斎美術館所蔵）。粉本の卷子作品を屏風形態へとイメージを拡張したとされる本作は、会場においてとりわけ圧巻であった。近くで見ると一見乱雑な筆のタッチも、作品から離れて眺めると迫力をもって作品の立体感と風景の空気感を演出している。画面に近づいて屏風と対面すると、まるで画中の登場人物になったような没入感を観るものに与える。左隻左上部に添えられた賛は、中国・明時代を想起させる書風を効果的に選択している。鉄斎77歳時、明治最晩年に描かれた本作に、近代書画芸術および鉄斎芸術のひとつの到達点が見えた気がした。

これまで図録でながめていた名品たちが眼前に広がる各館の多彩な展示は、文字通り眼福で、関西でこの1年に巡り合えたことは幸運であった。

次にやってくる大規模な鉄斎のメモリアルイヤーは、2036年の生誕200年だろうか。その頃には、筆者が本年に初対面した作品群をどのように感じ、鉄斎とその作品にどのような理解を深めているだろうか。12年後、ふたたび辰年がめぐってきたときの新たな鉄斎との出会いを楽しみにしつつ、筆を擱く。

（けんもち・しょうご／当館学芸員）